

〔訳注〕

## 唐代和蕃公主に関する諸史料の訳注

—『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』より—

菅 沼 愛 語

和蕃公主の降嫁政策は漢・隋・唐が用いた重要な外交の一形態であり、その主たる目的は周辺国との親善強化による勢力圏の安定的な拡充にあったが、中華諸王朝を取り巻く情勢によっては、例えば王朝初期や内乱時などの不安定期には、周辺国との軍事同盟の締結、援軍の獲得、敵対国への牽制など、多方面に亘る効力を発揮することもあった。近年、和蕃公主およびその外交的寄与は注目され、研究も進展している。<sup>①</sup>

特に、唐は歴代最多となる十六人の公主が周辺諸国に降嫁したため、以下の様に多彩な特徴や多様な事例が見られる。

①和蕃公主の殆どは宗室の娘（仮制公主<sup>②</sup>）であったが、安史の乱後、初めて皇帝の実の娘（真公主、寧国公主・咸安公主・太和公主）がウイグルに降嫁した。②契丹・奚・ウイグルに降嫁した公主はレヴィレット婚の風習（詳細は後述）に従い、夫の死後、義理の息子や弟などと再婚した（燕郡公主・咸安公主など）。③夫に殺された公主もいた（静樂公主・宜芳公主）。④皇帝から離婚を命じられた公主もいた（固安公主）。⑤異民族の娘を公主に冊立し降嫁させた（交河公主・崇徽公主）。⑥降嫁先の王国の滅亡や反乱勃発などにより唐に逃げ帰る公主もいた（東華公主・東光公主・太和公主など）。

⑦公主の墓誌銘も出土した（弘化公主）。⑧稀な事例ではあるが、金城公主は唐・吐蕃間の和睦交渉を仲介し、固安公

主は奚王暗殺計画を阻止した。<sup>(3)</sup>

以上の如く、唐の和蕃公主は外交の一端を担うなど興味深い事例も提供する。最近では和蕃公主に関わる墓誌も幾つか出土しており、既存の漢籍史料から得られるデータとの整合性を精査することが益々重要になってきている。<sup>(4)</sup> 本稿では和蕃公主研究のための基礎的な作業として、『旧唐書』『新唐書』の周辺国の伝（吐蕃伝・契丹伝・奚伝・回鶻伝・西域伝等）<sup>(5)</sup>、『新唐書』卷八三諸帝公主伝、『資治通鑑』より、十六名の唐代和蕃公主に関する記述を抽出し訳注を行う。使用するテキストは、中華書局の標点本（旧唐書一九七五年版、新唐書一九七五年版、資治通鑑一九五六年版）である。最初に、和蕃公主に関する重要単語について説明しておく。

・「レヴィレート婚（嫂婚制）」 匈奴・烏孫・突厥などには、父兄が亡くなると息子や兄弟が継母や兄嫁を娶るレヴィレート婚の風習があり（『史記』卷一一〇匈奴伝、『漢書』卷九六西域伝、『周書』卷五〇突厥伝）、漢や隋も公主の再婚を認めている。<sup>(6)</sup> 唐代でも、契丹・奚・ウイグルに降嫁した公主達は、概ね夫の死後、後継者と再婚した。

・「可敦（カトン）」という称号 可敦は可汗の妻（『周書』突厥伝）であり、ウイグルに降嫁した公主は可敦と称された。太和公主の降嫁時には可敦の即位式も行われた（後述）。

（一）弘化公主（吐谷渾の慕容諾曷鉢に降嫁）

・『旧唐書』卷一九八、西戎伝、吐谷渾伝

吐谷渾王の慕容諾曷鉢が入朝し<sup>(7)</sup>婚姻を請願した。太宗は（貞観）十四年（六四〇）弘化公主を諾曷鉢の妻となし、多くの贈物を授けた。（貞観）十五年（六四一）諾曷鉢の部下の丞相宣王が国政を壟断して陰謀を企て、兵を集め山神を祭ると偽り称して公主を襲撃し、諾曷鉢を脅して吐蕃に出奔しようとする日を決めた。…その後、吐谷渾は吐蕃と互いに攻

めあい、おのおの遣使して唐に援軍を要請したが、高宗はいずれに対しても援軍の派遣を許さなかった。吐蕃が激怒し兵を率い吐谷渾を攻撃したので諾曷鉢は防戦することができず、吐谷渾を逃げ出し、弘化公主を連れ涼州に避難した。<sup>(8)</sup>

・『新唐書』卷二二一上、西域伝上、吐谷渾伝

吐谷渾王の慕容諾曷鉢が毎年入朝したので、太宗は宗室の娘を弘化公主となし諾曷鉢の妻とし、道明と右武衛將軍の慕容宝に詔し節を持って公主を吐谷渾まで送らせた。しかし吐谷渾では大臣の宣王が跋扈して反乱を企て、公主を襲撃し、諾曷鉢を攫って吐蕃への出奔を画策した。：高宗が即位すると、公主が降嫁している縁で諾曷鉢は駙馬都尉を押し、<sup>(9)</sup> に行かせた。十一月、諾曷鉢が長安に到着すると、高宗は宗室の娘金城郡主を諾曷鉢の長男蘇度摸末の妻とし、左領軍衛大將軍を拜した。しばらくして蘇度摸末が亡くなったので、弘化公主は、次男で右武衛大將軍・梁漢王の闡盧摸末とともに来朝し婚姻の締結を請願した。高宗は、宗室の娘金明郡主を闡盧摸末の妻とした。：吐蕃が出兵し、不意を衝いて吐谷渾の軍勢を黄河の畔で撃破した。諾曷鉢は国を保てず、弘化公主とともに数千の天幕を率い涼州に逃走した。

・『資治通鑑』卷一九五、太宗貞観十三年（六三九）条

十二月：己丑の日、吐谷渾王の諾曷鉢が来朝したので、太宗は宗室の娘を弘化公主となし、諾曷鉢の妻とした。<sup>(11)</sup>

・『資治通鑑』卷一九六、太宗貞観十五年（六四二）条

四月：丁巳の日、果毅都尉の席君買が騎兵の精銳百二十を率い、吐谷渾の丞相宣王を襲撃して破り、宣王の兄弟三名を斬った。初め吐谷渾の丞相宣王は国政を壟断し、陰謀を企て、弘化公主を襲い、吐谷渾王の諾曷鉢を掠め取って吐蕃に出奔しようと計画した。諾曷鉢は宣王の陰謀を聞き知るや軽装の騎馬に乗り鄯善城に逃げた。諾曷鉢の臣下威信王が兵を率い諾曷鉢を迎えたので、席君買は宣王を討ち誅殺することができた。

・『資治通鑑』卷一九九、高宗永徽三年（六五二）条

冬十一月庚寅の日、弘化長公主が吐谷渾から来朝した。

・『資治通鑑』卷二〇一、高宗龍朔三年（六六三）条

五月：吐蕃と吐谷渾が互いに攻撃しあい、おのおの使者を派遣して上奏し、曲直を論じ、援軍の派遣を求めたが、高宗はいずれに対しても援軍派遣を許さなかった。吐谷渾の大臣素和貴が罪を得て吐蕃に逃亡し、吐谷渾の虚実を詳しく述べたので、吐蕃は出兵して吐谷渾を攻撃し大いに打ち破った。吐谷渾の可汗諸曷鉢は弘化公主とともに数千の天幕を率い、国を捨てて逃走し、涼州に難を避け、唐の国内に移住したいと請願した。

(2) 文成公主〔吐蕃の棄宗弄讚・ソンツェンガムボに降嫁〕

・『旧唐書』卷一九六上、吐蕃伝上

貞観十五年（六四二）太宗は文成公主を吐蕃王棄宗弄讚（ソンツェンガムボ）の妻となし、礼部尚書の江夏郡王道宗に降嫁のことを司らせ、節を持って公主を吐蕃に送らせた。弄讚は部下の兵を率い柏海に駐屯し、河源で親迎の礼を尽くして公主を迎え、道宗に会って恭しく婿の礼をとった。：弄讚は公主とともに帰国すると：都市を築き家屋を建て公主を住まわせた。公主が、赤土を顔に塗る吐蕃人の楮面という風習を嫌ったので、弄讚は吐蕃中に命令し、仮に楮面を止めさせた。：永隆元年（六八〇）文成公主が亡くなった。高宗は吐蕃に使者を派遣し公主の死を弔わせた。

・『新唐書』卷二二六上、吐蕃伝上

（貞観）十五年、太宗は宗室の娘文成公主を吐蕃王の妻とし、江夏王道宗に詔して節を持って公主を吐蕃に護送させ、館を河源王の国に築かせた。弄讚は兵を率い柏海で駐屯し、自ら公主を迎え、道宗に会い、恭しく婿の礼をとった。：

帰国後：公主のために城を一つ築いて後世に誇示したいと思ひ、宮殿を建てて公主を住まわせた。公主が、赤土を顔に塗る吐蕃人の風習を嫌ったので、弄讚は国中に命令しこれを禁止した。…永隆元年、文成公主が亡くなったので、高宗は吐蕃に使者を派遣し公主の死を弔わせた。

・『資治通鑑』卷一九五、太宗貞觀十四年（六四〇）条

十月：丙辰の日、吐蕃王が大臣の禄東贊を派遣し、黄金五千兩、珍しい玩具数百を献上し、唐との婚姻を請願した。太宗は吐蕃王が文成公主を妻とすることを許した。

・『資治通鑑』卷一九六、太宗貞觀十五年（六四一）条

春正月：丁丑の日、太宗は礼部尚書・江夏王の道宗に命じ、節を持って文成公主を吐蕃に送らせた。

・『資治通鑑』卷二〇二、高宗永隆元年（六八〇）条

十月：丙午の日、文成公主が吐蕃で亡くなった。

③ 金城公主〔吐蕃の棄隸踏贊・チデツクツエンに降嫁〕

・『旧唐書』卷一九六上、吐蕃伝上

神龍元年（七〇五）吐蕃の使者が来朝し吐蕃王の喪を告げたので、中宗は哀悼の儀式を行い、政務を一日やめた。吐蕃王の祖母が急に大臣の悉薰熱を派遣し特産品を献上して孫のために求婚したので、中宗は養女であった雍王守礼（中宗の次兄賢の子）の娘を金城公主となし吐蕃に降嫁させることを許した。これ以降、吐蕃は毎年朝貢した。景龍三年（七〇九）十一月、吐蕃はまた大臣の尚賛吐らを公主を迎えるため派遣した。…その月（景龍四年正月）<sup>14</sup>中宗は始平県に赴き金城公主を見送った。…（開元）十七年…玄宗は（皇甫）惟明、内侍の張元方を吐蕃に派遣した。惟明、元方らは

吐蕃に到着すると吐蕃王と金城公主に会い、玄宗の意向を詳細に告げた。：金城公主はまた別に黄金の鴨型の盤、杯、様々な贈物等を献上した。(開元)十八年(七三〇)十月、名悉獵らが長安に到着した。：この頃、吐蕃の使者が上奏し「金城公主が『毛詩』『礼記』『左伝』『文選』を各々一部ずつ頂きたいと願っておられます」と言った。：(開元)二十九年(七四二)春、金城公主が亡くなり、吐蕃は使者を派遣し公主の喪を告げた。<sup>15</sup>さらに和平を請願したが玄宗は許さなかった。使者の到来から数ヶ月後、玄宗は初めて公主のために光順門外で哀悼の儀式を行い三日間政務をやめた。

・『新唐書』卷二二六上、吐蕃伝上

中宗は雍王守礼の娘を金城公主となし吐蕃王に嫁がせることにした。：中宗は公主を見送るため始平に向出した。：公主は吐蕃に到着すると自ら城を築いて住んだ。：公主は玄宗に書を奉り和親の許可を願い、さらに「吐蕃王の君臣は唐皇帝と盟約に署名したいと願っています」と言った。：(皇甫)惟明が「：陛下が金城公主に勅書を下し、吐蕃王との盟約締結を許可して国境の憂いを取り除いて下されば、民に安寧をもたらす良策となるでしょう」と言ったので玄宗はこの建策を採用し：書簡を公主に賜った。<sup>16</sup>

・『資治通鑑』卷二〇九、中宗景龍三年～景雲元年条

景龍三年(七〇九)：十一月：乙亥の日、吐蕃王が大臣の尚贊咄ら千餘人を派遣し金城公主を迎えに来た。：景雲元年(七一〇)正月：中宗は紀処訥に命じ公主を送って吐蕃に赴かせた。：己卯の日、中宗は自ら公主を送って始平に至り、二月癸未の日、長安に帰還した。金城公主が吐蕃に到着すると吐蕃王は別に城を築き、公主を住まわせた。

・『資治通鑑』卷二二三、玄宗開元二十一年(七三三)条

二月丁酉の日、金城公主が碑文を赤嶺に立てて唐と吐蕃の境界線を分けてほしいと請願した<sup>17</sup>ので玄宗はこれを許した。

・『資治通鑑』卷二二四、玄宗開元二十八年（七四〇）条

金城公主が亡くなったので吐蕃は（使者を派遣し）公主の喪を告げ、さらに和平を請願したが、玄宗は（吐蕃との和平を）許さなかった。

（4）永樂公主〔契丹<sup>(18)</sup>の李失活に降嫁〕

・『旧唐書』卷一九九下、契丹伝

翌年（開元五年<sup>(19)</sup>、七二七年）契丹の李失活が入朝したので、玄宗は宗室の外甥の娘楊氏を封じて永樂公主となし、李失活の妻とした。

・『新唐書』卷二一九、契丹伝

玄宗は東平王の外孫楊元嗣の娘を永樂公主<sup>(20)</sup>となし、李失活の妻とした。翌年（開元六年、七二八年）李失活が死去した。…玄宗は、李失活の弟娑固に封冊と領地を継承させた。翌年（開元七年、七二九年）李娑固が永樂公主と来朝し、玄宗は宴と贈物を授けた。

・『資治通鑑』卷二二一、開元五年（七二七）条

十一月丙申の日、契丹王の李失活が入朝した。十二月壬午の日、玄宗は東平王の外孫楊氏を永樂公主となし、李失活の妻となした。

(5) 燕郡公主〔契丹の李鬱于に降嫁。李吐于と再婚〕

・『旧唐書』卷一九九下、契丹伝

開元十年（七二二）契丹の李鬱于が入朝し、婚姻を請願した。そこで玄宗は、従妹の夫で率更令の慕容嘉賓の娘を燕郡公主に封じ、李鬱于の妻とした。：翌年（開元十一年、七二三年）李鬱于が病死し、弟の李吐于が兄に代わって契丹の民を統べ、兄の官職と爵位を継承したので、玄宗は燕郡公主を（再婚させて）李吐于の妻とした。李吐于は大臣の可突于とまた互いに対立し、開元十三年（七二五）燕郡公主を伴って唐に亡命した。

・『新唐書』卷二一九、契丹伝

（李）鬱于が来朝したので玄宗は率更令を授け、宗室出身の慕容氏の娘を燕郡公主とし、李鬱于の妻とした。：李鬱于が亡くなり、弟の李吐于が後を継いだのが、可突于と対立し、契丹の民を支配することができなかったので、燕郡公主を伴って唐に亡命した。

・『資治通鑑』卷二二二、玄宗開元十年（七二二）条

五月：己丑の日、玄宗は餘姚県主の娘慕容氏を燕郡公主となし、契丹王李鬱于の妻とした。

(6) 東華公主〔契丹の李邵固に降嫁〕

・『旧唐書』卷一九九下、契丹伝

その冬（＝開元十三年<sup>(2)</sup>、七二五年の冬）、玄宗が（泰山で封禪を行うため）東巡すると、李邵固が行宮を訪問し玄宗に従って泰山の麓まで来たので、玄宗は李邵固を左羽林軍員外大將軍・静析軍経略大使に任じ、改めて広化郡王に封じた。また、玄宗の従外甥の娘陳氏を東華公主に封じ李邵固の妻とした。：開元十八年（七三〇）可突于が李邵固を殺し、契



丹の部落を率い、奚の民を脅迫して突厥に投降したので東華公主は平盧軍に避難した。

・『新唐書』卷二一九、契丹伝

翌年（開元十四年<sup>22</sup>、七二六年）、玄宗は李邵固に左羽林衛大將軍を拜し、広化郡王に封じ、宗室の娘陳氏を東華公主となし邵固の妻とした。：そののち三年（開元十八年）、可突于が李邵固を殺害し、屈烈を擁立して契丹の王となし、奚の民を脅してともに突厥に投降したので、東華公主は平盧軍に逃げた。

・『資治通鑑』卷二一三、玄宗開元十四年（七二六）条

春正月癸未の日、玄宗は改めて契丹の松漠王李邵固を広化王となし、奚の饒樂王李魯蘇を奉誠王となした。また、玄宗の従甥の陳氏を東華公主となして李邵固の妻とし、成安公主の娘韋氏を東光公主となして李魯蘇の妻とした。

・『資治通鑑』卷二一三、玄宗開元十八年（七三〇）条

五月：己酉の日、可突于が李邵固を殺し契丹人を率い、また奚の民を脅して叛き突厥に投降したので、奚王の李魯蘇、および妻の韋氏（東光公主）、李邵固の妻陳氏（東華公主）はみな唐に亡命した。

⑦ 固安公主〔奚の李大輔に降嫁。李魯蘇と再婚〕

・『旧唐書』卷一九九下、奚伝

その年（開元五年<sup>24</sup>、七一七年）、奚の李大輔が入朝したので、玄宗は詔し従外甥の娘辛氏を固安公主<sup>25</sup>となし大輔の妻とし絹千五百匹を賜った。玄宗は右領軍將軍の李濟を派遣し、節を持って大輔を送り奚に帰国させた。開元八年（七二〇）大輔が軍を率い契丹に加勢に赴き戦死した。弟の魯蘇が後を継ぎ契丹王に即位した。開元十年（七二二）李魯蘇が入朝したので、玄宗は詔して魯蘇に兄の位階、饒樂郡王・右金吾員外大將軍・保塞軍經略大使を繼承させ絹千匹を賜つ

た。また固安公主を（再婚させて）魯蘇の妻とした。しかし固安公主は（魯蘇の）嫡母と仲が悪く互いに論告しあったので、玄宗は詔し固安公主を離婚させ、成安公主の娘韋氏を東光公主となし再び魯蘇の妻とした。

・『新唐書』卷二一九、奚伝

玄宗は開元二年（七一四）：（奚の李大酺を）饒楽郡王・左金吾衛大將軍・饒楽都督に封じた。宗室の娘辛氏に詔して固安公主となし、李大酺の妻とした。翌年（開元五年<sup>26</sup>）李大酺は自ら入朝し固安公主と結婚した。：李大酺は後に契丹の可突于と戦って亡くなり、弟の魯蘇が奚を支配し王位を継承した。：牙官の塞黙羯が謀反を企てたので、固安公主は酒宴を設けて塞黙羯をおびき寄せ殺害した<sup>27</sup>。玄宗は公主の功績を褒め数万の品を賜った。しかし公主が（李魯蘇の）母と互いに論告しあって罪を得たので、玄宗は改めて盛安公主の娘韋氏を東光公主となし、李魯蘇の（新しい）妻とした。

・『資治通鑑』卷二二一、玄宗開元五年（七二七）条

夏四月甲戌、玄宗は奚王李大酺の妃辛氏に固安公主の称号を授けた。

〔8〕東光公主〔奚の李魯蘇に後妻として降嫁〕

・『旧唐書』卷一九九下、奚伝

玄宗は詔し（固安公主を）離別させ、成安公主の娘韋氏を東光公主となし再び李魯蘇の妻とした。：（開元）十八年（七三〇）奚の民は契丹の衙官可突于に脅されて再び唐に叛き突厥に投降した。李魯蘇は奚を統御できず渝関に逃亡し、東光公主も平盧軍に避難した。

・『新唐書』卷二一九、奚伝

玄宗は盛安公主の娘の韋氏を東光公主となし、李魯蘇の妻とした。：契丹の可突于が叛き、奚の民を脅し突厥に帰順

したので、李魯蘇は奚を統御できず楡関に逃走し、東光公主も平盧軍に避難した。

・『資治通鑑』卷二二三、開元十四年（七二六）条

春正月癸未の日、玄宗は改めて契丹の松漠王李邵固を広化王となし、奚の饒樂王李魯蘇を奉誠王とした。また、玄宗の從甥の陳氏を東華公主となして李邵固の妻とし、成安公主の娘の韋氏を東光公主となして李魯蘇の妻とした。

・『資治通鑑』卷二二三、玄宗開元十八年（七三〇）条

五月：己酉の日、可突于が（契丹王の）李邵固を殺し、契丹人を率い、また奚の民を脅して叛き突厥に投降したので、奚王の李魯蘇、および妻の韋氏（東光公主）、李邵固の妻陳氏（東華公主）はみな唐に亡命した。

(9) 交河公主〔突騎施の蘇祿に降嫁〕

・『旧唐書』卷一九四下・突厥伝下、突騎施伝

開元三年（七一五）玄宗は突騎施の蘇祿を左羽林軍大將軍・金方道經略大使に任じ、特勤に昇進させ、侍御史の解忠順を派遣し璽書を授け忠順可汗に冊立した。これ以降、蘇祿が毎年遣使し朝貢したので玄宗は史懷道（阿史那懷道<sup>32</sup>）の娘を金河公主<sup>33</sup>となし蘇祿の妻とした。このとき杜暹が安西都護であったが、公主が牙官を派遣し馬千頭をもたらし安西で交易させ、使者が公主の命令を告げると杜暹は怒り、「阿史那氏の娘が命令し、私に指図するとは何事だ」と言つて使者を杖で打ち、拘留して帰さなかった。公主の馬は雪にあい、寒さのせいで盡く死んでしまった。蘇祿はたいそう怒り、出兵して安西四鎮を攻撃した。…（開元）二十六年（七三八）夏、莫賀達干が軍を率い蘇祿を夜襲し殺害した。…（安西都護の蓋）嘉運は軍を率い莫賀達干を討ち…金河公主を捕え帰国した。<sup>34</sup>

・『新唐書』卷二二五下、突厥伝下、突騎施伝

玄宗は阿史那懷道の娘を交河公主となし蘇祿に娶せた。この年（開元十四年、七二六年）<sup>(35)</sup> 突騎施は安西で馬を交易したが、使者が公主の命令を安西都護の杜暹に伝えると杜暹は怒り「阿史那の娘が命令するとは何事だ」と言って使者を笞打ち、蘇祿に報告しなかった。蘇祿は怒り、密かに吐蕃と結んで拳兵し、安西四鎮を略奪し安西城を包囲した。

・『資治通鑑』卷二二二、玄宗開元十年（七二二）条

十二月庚子、十姓可汗・阿史那懷道の娘を交河公主となし突騎施の可汗蘇祿に嫁がせた。

・『資治通鑑』卷二二三、玄宗開元十四年（七二六）条

杜暹が安西都護であった。突騎施の交河公主が牙官を派遣し、馬千頭を連れて安西に赴き交易をさせた。使者が公主の命令を告げると杜暹は怒り、「阿史那の娘がなぜ私に命令できるのか」と言って使者を杖で打ち、拘留して帰国させなかった。馬は雪にあい盡く死んでしまった。突騎施可汗の蘇祿は激怒し、軍を出動させて安西四鎮を襲撃した。

・『資治通鑑』卷二二四、玄宗開元二十七年（七三九）条

秋八月乙亥の日、磧西節度使の蓋嘉運が突騎施可汗の吐火仙を捕えた。嘉運は…ついに曳建城に入城し、交河公主を捕えた。

(10) 和義公主〔寧遠（フエルガナ）<sup>(36)</sup>の阿悉爛達干に降嫁〕

・『新唐書』卷二二二下、西域伝下、寧遠伝

天寶三載…玄宗は宗室の娘を封じて和義公主となし、寧遠王の阿悉爛達干に降嫁させた。

・『資治通鑑』卷二一五、玄宗天寶三載（七四四）条

十二月…癸卯、玄宗は宗室の娘を和義公主となし寧遠の奉化王阿悉爛達干に降嫁させた。

(11) 静楽公主〔契丹の李懷秀（李懷節）に降嫁〕

・『新唐書』卷二一九、契丹伝

天寶四載（七四五）契丹の首領李懷秀が降伏したので、玄宗は松漠都督を授け、崇順王に封じ、宗室の娘独孤氏を静楽公主となし李懷秀の妻とした。<sup>(38)</sup>この年、李懷秀は静楽公主を殺害して叛き、唐から去った。范陽節度使の安祿山が李懷秀を討伐し撃破した。

・『資治通鑑』卷二一五、玄宗天寶四載（七四五）条

三月壬申、玄宗は外孫の独孤氏を静楽公主となし、契丹王の李懷節に降嫁させ、甥の楊氏を宜芳公主となし、奚の李延寵に降嫁させた。…九月…安祿山が辺境で功績をあげ、玄宗の寵愛を得たいと望み、頻繁に奚・契丹を侵略・略奪したので奚と契丹はそれぞれ公主達（宜芳公主と静楽公主）を殺害し反旗を翻した。安祿山は奚・契丹を討伐し撃破した。

(12) 宜芳公主〔奚の李延寵に降嫁〕

・『新唐書』卷二一九、奚伝

李延寵が唐に投降したので、玄宗は李延寵を饒楽都督・懷信王に任命し、宗室の娘楊氏を宜芳公主となし李延寵の妻とした。<sup>(39)</sup>李延寵は宜芳公主を殺して再び唐に叛いた。

・『資治通鑑』卷二一五、玄宗天寶四載条（静楽公主の記事を参照）

〔13〕寧国公主〔ウイグルの葛勒可汗〔英武威遠毗伽可汗〕に降嫁〕

・『旧唐書』巻一九五、迴紇伝

乾元元年（七五八）：秋七月丁亥の日、肅宗は詔を下し、幼い娘を封じて寧国公主となしウイグルに降嫁させることとした。公主がウイグルに降嫁する日、堂弟（従弟）の漢中郡王瑀を：「冊命英武威遠毗伽可汗使」に任命し、堂姪（従甥）の左司郎中巽を：副使とし、寧国公主礼会使を兼ねさせた。また：裴冕を派遣し、寧国公主を送って国境まで赴かせることにした。癸巳の日、ウイグルの英武威遠毗伽可汗を冊立するため肅宗は宣政殿に出向き、漢中王瑀は冊命を受けた。甲午の日、肅宗が公主を送って咸陽の磁門駅まで赴くと、公主が泣いて「国家の事は重要です。私は死んでも恨みません」と言うので、肅宗は涙を流して長安に帰った。：瑀は（可汗が長椅子の上に座っていたので）「天子は可汗に功績があるから公主を妻とし、可汗と婚姻の誼を結ぶのです。近頃中国が周辺国と和親を結ぶ際、みな宗室の娘に公主の称号を授けて降嫁させますが、寧国公主は天子の実の娘であり、才知と美貌を備えており、万里の遠方に降嫁させて可汗の妻となすのです。可汗は唐皇帝の女婿になるのですから礼儀を整えて公主を迎えるべきです。榻（長椅子）の上に座って勅書を受けることができましようか」と言った。そこで可汗は立ち上がり、勅書を奉り冊命を受けた。翌日、可汗は寧国公主を可敦に冊立した。ウイグルの首領達は喜び「唐の天子は貴く重々しい。天子の実の娘が来たぞ」と言った。：九月甲申の日、ウイグルは大首領の蓋將軍らを派遣し公主降嫁に感謝した。：十二月甲午の日、ウイグルは三人の婦人を派遣し寧国公主の降嫁に対し感謝を捧げた。：乾元二年（七五九）：夏四月、ウイグルの毗伽闕可汗が亡くなった。長男の葉護はすでに殺されていたので、末息子の登里可汗が擁立され、その妻が可敦となった。：毗伽闕可汗が初め死んだとき、牙官や都督らは公主を殉死させ可汗とともに埋葬しようとしたが、公主は「わが中国の儀礼では婿が死ぬと妻は喪に服し、朝夕大声を上げて泣き三年間喪服を着ます。いまウイグルは中国の婦人を娶ったのですか

ら中国の儀礼に従うべきです。もしいま私がウイグルの法に従うのであれば、どうして万里も離れた遠国と婚姻を結ぶ必要があるでしょうか」と言つて殉死を拒んだ。とはいえ公主もまたウイグルの髡面という葬送儀礼に従い、顔を切つて大声で泣いた<sup>(12)</sup>。公主には子供がいなかったので帰国することができた。秋八月、寧国公主がウイグルより帰還したので、肅宗は百官に詔し長安城の明鳳門の外で公主を迎えさせた。

・『新唐書』卷八三、諸帝公主伝、肅宗次女・寧国公主（肅国公主）伝

肅国公主は初め寧国に封じられた。鄭巽に嫁いたが（亡くなったので）、公主はまた薛康衡に嫁いだ。（しかし薛康衡も死去したので）乾元元年、公主はウイグルの英武威遠可汗に降嫁した。肅宗は公主のために府を設置した。（乾元）二年、公主は長安に帰還した。

・『新唐書』卷二二七上、回鶻伝上

乾元元年：（ウイグルの）使者が婚姻を請願したので肅宗は許可し、幼い娘寧国公主を降嫁させることとした。：肅宗は公主を見送るため咸陽に赴き何度も公主を慰め励ました。公主は泣いて「国家は多事でございます。私は死んでも恨みません」と言った。：瑒が可汗に対し「：近頃中国は夷狄と通婚しますが（降嫁するのは）みな宗室の娘です。しかし寧国公主は肅宗の娘であり徳と美貌を備え、万里の遠方に来てウイグルに降嫁するのです。：どうして座ったまま勅書を受けてよいでしょうか」と言う可汗は恥じ、立ち上がつて勅書を受け冊を受け、翌日、公主を尊び可敦となした。：にわかには可汗が亡くなり、ウイグル人は公主を殉死させようとしたが、公主が「中国では婿が死ぬと、妻は朝夕夫を悼み、三年間喪に服します。ウイグルは中国を慕つて、万里も離れた唐と婚姻を結んだのでしょうか。私は殉死すべきではありません」と言つたので、ウイグル人は公主を殉死させることをやめた。それでも公主はウイグルの葬送のための髡面の儀礼に従い、顔を傷つけ大声で泣いた。その後、公主は子供がいなかったので帰国することができた。

・『資治通鑑』卷二二〇、肅宗乾元元年（七五八）条

七月：丁亥、肅宗はウイグルの可汗を英武威遠毗伽闕可汗に冊立し、自分の幼い娘寧国公主を可汗の妻とした。

・『資治通鑑』卷二二一、肅宗乾元二年（七五九）条

四月：ウイグルの毗伽闕可汗が亡くなった。：ウイグルは寧国公主を殉死させたがった。公主は「ウイグルは中国の風俗を慕い、中国女性を娶って妻とした。ウイグルの風習に従わせたいのであれば、万里も離れた外国と婚姻を結ぶ必要があるでしょうか」と言って殉死を拒んだが、ウイグルの葬送儀礼に従って顔を傷つけ、声をあげて泣いた。

(14) 崇徽公主（ウイグルの牟羽可汗（登里可汗）に降嫁）

・『新唐書』卷二二七上、回鶻伝

大暦三年（七六八）、牟羽可汗の妻の光親可敦<sup>43</sup>が死去した。：そこで、代宗は翌年（大暦四年）、僕固懷恩の幼い娘を崇徽公主となして牟羽可汗の後妻とし、兵部侍郎の李涵に節を持たせ、公主を可敦に冊立し、あやぎぬ二万匹を賜った。この当時、唐は安史の乱によって財政が逼迫し降嫁の費用を捻出することができなかったため、代宗は公卿の驛馬や駱駝に課税し、公主がウイグルに降嫁するための費用を整えた<sup>44</sup>。宰相は崇徽公主を長安北の中渭橋まで見送った。

・『資治通鑑』卷二二四、代宗大暦四年（七六九）条

初め僕固懷恩が亡くなった時、代宗は懷恩の功績を賞美し、懷恩の娘を宮中に置き自分の娘として養育した。ウイグルが可敦となる女性の降嫁を請願したので、（大暦四年）夏五月辛卯の日、代宗は懷恩の娘を崇徽公主に冊立し、ウイグル可汗に嫁がせることにした。（五月）壬辰の日、兵部侍郎の李涵に公主をウイグルまで送らせた。：六月丁酉の日、崇徽公主は代宗に暇乞いをして出立し、ウイグル可汗の天幕に到着した。



(15) 咸安公主〔ウイグルの天親可汗に降嫁、忠貞可汗・奉誠可汗・懷信可汗と再婚〕

・『旧唐書』卷一九五、迴紇伝

(貞元)四年(七八八)十月、ウイグルの公主(可汗の妹毗伽公主)や使者達が到来したので、徳宗は延喜門まで出向き使節一行を謁見した。可汗は唐との和親を喜び、礼儀は恭しく、「昔、唐とウイグルは兄弟の關係にありましたが、いまウイグルは娘婿、つまり半子になりました」と上奏した。またウイグルの使者達は吐蕃の使者を罵り辱めた<sup>15</sup>。ウイグルはまた大首領達の妻妾ら約五十六名の婦人達を派遣し可敦を迎えに来させ、千餘人を派遣し、結納品として二千頭の馬を献じた。徳宗は朔州と太原に命じウイグル人七百名を分けて滞在させた。ウイグルの宰相と首領がみな来朝すると、徳宗は彼らを鴻臚寺と将作監に分けて宿泊させた。癸巳の日、徳宗は宣政殿でウイグルの使者達を謁見した。乙未の日、徳宗はウイグルの公主や使者達を召し麟徳殿で謁見し、各人に贈物を授けた。庚子の日、徳宗は咸安公主に詔し、ウイグル可汗に降嫁させることとし、公主府を設置し、官属を親王の例に準じさせた。徳宗は殿中監の嗣滕王湛然を咸安公主婚礼使に任命し、檢校右僕射の閔播を「送咸安公主及冊迴紇可汗使」に任じた。

・『新唐書』卷八三、諸帝公主伝、徳宗第八女・咸安公主(燕国襄穆公主) 伝

燕国襄穆公主は初め咸安に封じられた。ウイグルの武義成功可汗に降嫁した。公主の府を設置した。元和時代に亡くなり、爵位と諡号を贈られた。

・『新唐書』卷二二七上、回鶻伝上

徳宗は、ウイグルに公主降嫁を許した。ウイグルも約束通りに行うことを請願したので、徳宗は娘の咸安公主に詔してウイグルへの降嫁を命じ、またウイグルの使者合闕達干に対しても詔を下し、麟徳殿で公主と対面させた。徳宗はさらに中謁者に公主の絵画を持ってこさせ可汗に賜った。翌年(貞元四年、七八八年)、可汗は宰相の蹶跌都督ら千餘名を

唐に派遣し、また妹の骨咄祿毗伽公主も派遣し、大首領の妻ら五十名を率いて咸安公主を迎えさせ、徳宗に結納品も贈った。：徳宗は咸安公主を智恵端正長寿孝順可敦<sup>46</sup>とした。：（元和）三年（八〇八）、ウイグルの使者が来朝し咸安公主の喪を告げた。公主は四代の可汗（天親可汗・忠貞可汗・奉誠可汗・懐信可汗）と代々婚姻を結び、約二十一年間ウイグルにいた。

・『資治通鑑』卷二三三、徳宗貞元三年～貞元四年条

貞元三年（七八七）：九月：ウイグルの合骨咄祿可汗がしばしば和親を求め、さらに婚姻を結びたいと請願した。：癸亥の日、徳宗はウイグルの使者合闕將軍を帰国させ、咸安公主を可汗の妻とすることを許した。：貞元四年（七八八）：九月：ウイグルの合骨咄祿可汗が唐から通婚の許可を得てたいそう喜び、妹の骨咄祿毗伽公主や大臣の妻、宰相、蹠跌都督以下、千餘人を派遣して可敦を迎えに來た。言葉づかひも礼儀も恭しく、「昔、唐とウイグルは兄弟になりましたが、いまウイグルは唐の娘婿、半子になりました。もしも吐蕃が災いになるなら、息子が父上のために吐蕃を排除しましょう」と言った。またウイグルの使者は吐蕃の使者を罵り辱め、友好関係を絶った。：十月：庚子の日、徳宗は勅書を下して咸安公主を冊立し、ウイグル可汗に長寿天親可汗の称号を加えた。十一月、刑部尚書の関播を「送咸安公主、兼冊回鶻可汗使」に任命した。

・『資治通鑑』卷二三七、憲宗元和三年（八〇八）条

二月戊寅の日、咸安大長公主がウイグルで死去した。

## (16) 太和公主〔ウイグルの崇徳可汗に降嫁〕

・『旧唐書』卷一九五、迴紇伝

長慶元年（八二一）、ウイグルの毗伽保義可汗が亡くなった。：四月、穆宗はウイグルの新可汗を登羅羽録没密施句主録毗伽可汗に冊立した。：五月、ウイグルの宰相、都督、公主、マニ僧など五七三人が入朝し公主を迎えに来たので鴻臚寺に宿泊させた。穆宗は太和公主に勅書を下しウイグルに降嫁させて可敦となし、中書舎人の王起に命じて鴻臚寺に赴かせ（ウイグルの使者達に）告知させた。：吐蕃が青塞堡を侵犯したのは、唐とウイグルの和親が原因であった。<sup>(47)</sup>塩州刺史の李文悦は出兵して吐蕃軍を撃退し、ウイグルも「騎兵一万を北庭から出撃させ、騎兵一万を安西から出撃させて吐蕃の妨害を撃退しながら太和公主を迎え、ウイグルに帰国します」と上奏した。その月（五月）穆宗は太和公主に勅書を下し、「太和公主をウイグルに降嫁させ、特別に公主府を設置し、官属を親王の例に倣わせる」と述べた。（じつは）ウイグルは咸安公主の没後しばしば唐に心服し昔の友好関係を維持しよう請願したが、長い間、許されなかった。元和末（八二〇年頃）になってウイグルの願いはより切実になった。憲宗はウイグルが唐王室に対して功績があり、また吐蕃が近頃、辺境を襲撃し災厄になっていたため、ついにウイグルへの公主降嫁を許したが、（元和十五年、八二〇年）憲宗が崩御し降嫁は実現しなかった。新たに穆宗が即位し、翌年（長慶元年、八二一年）十番目の妹を封じて太和公主となし、降嫁させることを決めた。ウイグルの登邏骨没密施合毗伽可汗は使者の伊難珠、句録都督思結、並びに外宰相、駙馬、梅録司馬、それに公主一人、葉護公主一人、及び達干、駱駝、馬千餘を送って公主を迎えに来た。太和公主がウイグルに向けて出立する際、穆宗は通化門の左室に向いて見送り、百官を章敬寺の前で整列させた。儀衛は盛大で、唐の男女は城を傾け賑やかに花嫁行列を見物した。十一月、振武節度使の張惟清が「詔に従って三千の兵を出撃させて蔚州に赴きますが、そのうち一千はすでに出撃し、残りの二千は太和公主が国境を出るのを待って出動させます」

と上奏した。また張惟清は、「天徳軍から転送された文書によれば、ウイグル人七六〇名が駱駝と車を引いて相次いで黄蘆泉に到着し太和公主を迎えています」と上奏した。豊州刺史の李祐も「太和公主を迎えるウイグル人三千名が柳泉のそばに陣営を築き、吐蕃軍による妨害を阻止しています」と上奏した。：長慶二年（八二二）閏十月、金吾大將軍の胡証：は太和公主をウイグルに送り届け、その後ウイグルから長安に帰還し、穆宗に対してウイグルでの出来事を報告した。初め太和公主がウイグル可汗の天幕から二晩ほど離れた場所に達した時、可汗が数百騎を派遣し公主と一緒に他の道から先に行きたいと請願したが、胡証は「いけない」と言った。ウイグルの使者は「前に咸安公主が来た時には花門を去ること数百里の所で先に行つた。いまなぜ私を拒否するのか」と言ったが、胡証が「わが国の天子が詔を出して公主を送り、可汗に賜つたのだ。いま公主はまだ可汗に会っていない。どうして先に行けようか」と言ったので、ウイグルの使者は公主を連れて行くのをやめた。公主が可汗の天幕に到着すると、可汗は吉日を選んで公主をウイグルの可敦に冊立した。可汗はまず楼に登り、東に向かつて座ると、毛氈の幔幕を楼の下に設けて公主を座らせ、大勢の胡人に命じて公主に胡法を教えさせた。公主は初めて唐の衣服を脱いで胡服を着用したが、その際、一人の老女が公主に付き添つた。公主は楼の前に出ると西に向かつて拝礼した。可汗は座つたままこれを眺め、公主は再び伏し拝むと、また毛氈の幔幕の中に入り、前に着ていた服を脱ぎ、可敦の服を着た。緩やかな上衣はみな茜色で、黄金の飾りの付いた冠は角の前指のようだった。その後、公主は楼を出て可汗を伏し拝んだが、これは初めの拝礼と同様であった。ウイグルはまず大きな輿を設け、衝立の前に小さな席を設けた。案内役が公主の手を引いて輿に乗せ、迴紇九姓の大臣らが分担して輿を背負い、庭の中で太陽の回る方角に従つて九回右まわりに輿を回した。<sup>(48)</sup>それから公主は輿から降りて楼に登り、可汗と一緒に東向きに座つた。臣下が拝謁し、可敦となった太和公主に対して拝礼した。可敦は自分の天幕を持ち、二人の大臣に対し天幕の中に入出入りするよう命令した。胡証達が帰国する際、可敦は天幕内に宴席を設け、終日天幕に留

まりつづけて大声で泣いたので、可汗は唐の使者達に対し手厚く贈りものをした。：（大和）九年（八三五）六月、入朝したウイグルの使者は、太和公主が献上した馬、女の射手七人、沙陀の子供二人を玄宗に献じた。：（開成五年、八四〇年）キルギスはウイグルを撃破<sup>20</sup>し、太和公主を捕えた。キルギスは李陵の後裔を自称し、（同じ李陵の末裔である）唐とは同姓であると称し、ついに十人の達干に命じ公主を送って辺境の塞にやって来た。ウイグルの烏介可汗が途中でキルギスの達干らに遭遇し、達干らを殺害したので、太和公主はかえって烏介可汗の手中に落ちた。こうして烏介可汗は公主を人質となし、同行して南の大砂漠を越えて天徳軍の境界に至り、天徳城を太和公主の居城として与えるよう、武宗に上奏して請願した。：（烏介可汗は）太和公主を連れて逃げるのができなかった。豊州刺史石雄の兵が太和公主の天幕に遭遇し、公主を迎えて帰国した。

・『新唐書』卷八三、諸帝公主伝、憲宗第十七女・太和公主（定安公主）伝

定安公主は初め太和公主に封じられ、ウイグルの崇徳可汗に降嫁した。会昌三年（八四三）、太和公主が帰国すると、武宗は宗正卿の李仍叔、秘書監の李踐方らに詔して景陵（憲宗の陵）に報告させた。太和公主が太原に至ると、武宗は詔を下して公主をいたわり様子を尋ね、キルギスが献上した白貂の皮や玉の指輪を賜った。公主が長安に到着すると、武宗は百官に詔して公主を迎えさせ再拜させた。：公主は輅に乗って（景陵と光陵に赴き）憲宗と穆宗の部屋に行き、すすり泣いた。退室後、公主は光順門に赴き、服を着替え、冠や首飾りをはずして処罰を待ち、自らウイグルとの和親に成果がなかったことを詫びた。：翌日、公主は太皇太后（穆宗の母懿安皇太后）に拝謁した。武宗は公主を昇進させて長公主に封じ、太和府を廃止した。

・『新唐書』卷二二七下、回鶻伝下

穆宗は詔し、太和公主をウイグルに降嫁させることを決めた。公主は憲宗の娘である。穆宗は公主府を設置し左金吾

大將軍の胡証、光祿卿の李憲に節を持たせ公主をウイグルまで送らせることにした。太府卿の李説は婚禮使となり、公主を冊立して「仁孝端麗明智上寿可敦」となし、太廟に報告した。穆宗は通化門に向向いて公主に饒し、大勢の臣下は整列し道で公主を見送った。公主が塞を出て可汗の天幕から百里の距離まで来ると、可汗はまず公主と問道から秘かに会おうとした。胡証が許さなかつたので、ウイグル人は「昔、咸安公主は問道から可汗のもとに行つた」と言つた。しかし胡証が「天子は私に詔し、公主を送つて可汗に授けるよう命じた。いま私がまだ可汗に会つていないのに、公主を先に行かせてはならぬ」と言つたので、ウイグル人は公主を連れて行くのをやめた。（公主が可汗の天幕に到着後）可汗は楼に登り、東に顔を向け、楼の下に毛氈の幔幕を張つて公主を座らせ、胡服を着るよう請願した。公主は一人の老婆を侍らせ、幔幕を出ると西に向かつて拝礼してから退き、それから可敦の服を着た。可敦の服は赤い大きな上衣であつた。公主は、前後の鋭い黄金の冠をかぶつた。公主はまた出て拝礼し、その後、曲がった輿に乗つた。九人の大臣達が互いに分担して公主の輿を担ぎ、庭の内側を右に九回まわつた。それから公主は輿から降り、楼に登つて可汗と並んで座り、東に顔を向けた。臣下達が次々に可汗と公主に拝謁した。可敦もまた自分の天幕を築き、二人の大臣を天幕の中に入入りさせた。胡証達が帰国する際、可敦が大々的に宴席を設け、悲しみ泣いて唐を慕つたので、可汗は唐の使者に手厚く贈物を授けた。：（会昌元年、八四一年）キルギスはすでにウイグルを撃破し太和公主を捕えると、また自らが李陵の後裔であり、唐皇帝と同族であると称して使者の達干を派遣し、公主を護衛し唐への来朝を試みた。ウイグルの烏介可汗は怒り、キルギスの達干を追撃して殺害し、公主を捕え、南の砂漠を渡つた。このため辺境の住民はウイグルの襲来をたいそう恐れた。：太和公主は使者を派遣し、烏介可汗はすでに即位したので冊命するよう請願した。また、ウイグルの大臣頡于伽思らは表を奉り「振武軍に寓居し、太和公主と烏介可汗を住まわせたい」と請願した。武宗は：ウイグル人を慰撫させ二万斛の食料を授けたが、振武軍に可汗らを寓居させることは許さなかつた。：翌年（会昌二年、

八四二年）ウイグルは太和公主を奉じて漠南に至り、雲州・朔州に入り、横水に侵入して殺戮と略奪を展開し、その後、進軍方向を変え、天徳軍と振武軍の間にそつて遠慮会釈なく家畜を略奪した。：（唐の石）雄が太和公主に遭遇し、奉つて長安に帰還した。

・『資治通鑑』卷二四一〜卷二四二、穆宗長慶元年（八二二）条

長慶元年：五月丙申朔の日、ウイグルが都督・宰相ら五百餘人を派遣し公主を迎えに来た。：（五月）癸亥の日、穆宗は太和公主をウイグルに降嫁させた。公主は穆宗の妹である。吐蕃は唐とウイグルの通婚を聞き、六月辛未の日、青海堡を襲撃した。塩州刺史の李文悦が吐蕃軍を撃退した。戊寅の日、ウイグルは上奏し「騎兵一万を北庭から出撃させ、騎兵一万を安西から出撃させて吐蕃軍の攻撃を防ぎながら太和公主をウイグルに迎えます」と言った。：（七月）辛酉の日、太和公主が長安を出立した。

・『資治通鑑』卷二四六、武宗会昌元年〜会昌二年条

会昌元年（八四二）：十一月、李徳裕が上奏し、「いまウイグルが（キルギスに）破れて滅亡し、太和公主の所在はいまだ明らかではありません。もし使者を派遣して公主を訪問させなければ、ウイグルはきつと、唐は公主を降嫁させたが、もともと愛惜の気持ちはなく、公主を見捨て、ウイグルの心情も傷つけた、と言うことでしょう。通事舎人の苗嶺を派遣し、詔を持って温没斯のもとに行かせ、公主に勅書を伝え、さらに、温没斯が反逆と帰順のどちらを望んでいるかを判断すべきです」と言ったので武宗はこれに従った。：初めキルギスがウイグルをすでに撃破し太和公主を得ると、自ら李陵の後裔であり、唐と同姓であると称し、達干十名を派遣し公主を奉つて唐に帰順しようとした。しかしウイグルの烏介可汗は兵を率いて達干を要撃し、キルギスの使者達を盡く殺害し、太和公主を人質となして南下し、砂漠を渡り天徳軍の境界に駐屯した。太和公主は使者を派遣して上奏すると、「可汗がすでに即位したので冊立してほしい」と



言った。烏介可汗も大臣の頡干伽斯らを派遣して上奏し、振武軍の城一つを借りて公主と可汗を仮住まいさせたいと言った。十二月庚辰の日、武宗は制して右金吾大將軍の王会らを派遣し回鶻を慰め、米二万斛を授けた。また、武宗は烏介可汗に勅書<sup>(2)</sup>を賜り、諭して「ウイグルの民を率い少しずつ旧領を回復するがよい。塞に寄寓するのは良策ではない」と言い、さらに「振武軍の城一つを借りたいと言うが、先帝の時代でもそのようなことはなかった。あるいは別の良い土地に移動するがよい。唐に支援を求めるとしても漠南で駐屯し、進軍を停止させるべきである。朕は太和公主の入朝を許し、自ら事情を問うであろう」と言った。：会昌二年（八四二）：十一月：武宗は使者を派遣し公主に冬服を賜り、李徳裕に命じて書簡を記させ公主に賜ったが、その大意は、「先帝はウイグルとの婚姻を割愛し、義によつて国家を安んじ、ウイグルが夷狄の侵略を防いでくれるなら辺境の塞は平穩であると語っていた。しかしいまウイグルの所業は理に適わぬ。ウイグルが馬首を南に向けるたび、叔母上は高祖や太宗の威靈を恐れないのか。ウイグルが辺境を略奪するたびに、太皇太后の慈愛を思い出さずにいられようか。あなたはウイグルの国母なのだから、ウイグルを指揮できはずだ。もしウイグルが皇帝の命令に従えないのであれば、私は即刻ウイグルの姻族を切り捨て、今日より以降あなたのことを叔母とは呼ばぬ<sup>(3)</sup>」というものであった。

・『資治通鑑』卷二四七、武宗会昌三年（八四三）条

二月：庚寅の日、太和公主が長安に帰還すると武宗は改めて安定大長公主に封じ、宰相に詔し百官を率いて章敬寺の前で公主を迎え対面するよう命じた。公主は光順門に到着すると盛服を脱ぎ、かんざしと耳飾りもはずし、ウイグルが唐の恩にそむき、和親に成果がなかった罪を詫びた。武宗は中使を派遣して公主を慰め諭し、その後、大明宮に入った。



## 注

- (1) 日野開三郎「唐代の和蕃公主」(『東洋史学論集』第九卷、三一書房、一九八四年三月、初出は一九七八年)、長沢恵「中国古代の和蕃公主について」(『海南史学』二二号、一九八三年)、崔明德「中国古代和親通史」(人民出版社、二〇〇七年)、藤野月子「王昭君から文成公主へ」(九州大学出版会、二〇一二年)、拙稿「降嫁が成立しなかった和蕃公主の事例に見る唐代の外交関係」(『古代文化』七四巻第一号、二〇三二年)等。
- (2) 日野開三郎「唐代和蕃公主の真假制と資装費」(『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、一九七九年) 参照。
- (3) 唐代和蕃公主の詳細、唐の外交戦略等については拙著『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移』(溪水社、二〇一三年)、拙稿「和蕃公主を通じての唐の外交戦略」(『総合女性史研究』三二号、二〇一四年) 参照。
- (4) 例えば石川澄恵氏は阿史那懷道夫妻の墓誌を検討し、交河公主の称号等を確定した。石川澄恵「唐初期の西方経営と西突厥阿史那氏について―阿史那懷道夫妻墓誌を手掛かりに」(『日本女子大学院文学研究科紀要』一九号、二〇一二年)。
- (5) 『旧唐書』『新唐書』の吐蕃伝、契丹伝、奚伝、突騎施伝(突厥伝に含まれる)、回鶻伝については佐藤長氏、田村実造氏、護雅夫氏、佐口透氏の訳注、『新唐書』西域伝については小谷仲男氏と筆者の訳注がある。佐藤長氏訳注「吐蕃伝(旧唐書・新唐書)」(『騎馬民族史1正史北狄伝』平凡社、一九七三年)、田村実造訳注「契丹伝・奚伝(旧唐書・新唐書)」(『騎馬民族史1正史北狄伝』平凡社、一九七一年)、護雅夫訳注「西突厥伝(旧唐書・新唐書)」、佐口透訳注「回鶻伝(旧唐書・新唐書)」(『騎馬民族史2正史北狄伝』平凡社、一九七二年)、小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注(旧唐書・新唐書)」(『京都女子大学院文学研究科紀要・史学編』九号・十号、二〇一〇年・二〇一一年)。
- (6) 漢武帝は烏孫に降嫁した細君(江都公主)が夫の孫との再婚を拒絶した際、「その国の風俗に従え」と命じ細君を義理

の孫と再婚させ（『漢書』西域伝）、隋煬帝は突厥に降嫁した義成公主が夫（啓民可汗）を亡くした際、義理の息子始畢可汗と再婚させた（『隋書』卷八四突厥伝）。

（7）『旧唐書』卷三太宗紀下によれば、貞観十三年十二月に慕容諾曷鉢が公主を迎えるため唐に到来し、貞観十四年二月に弘化公主が吐谷渾に降嫁した。

（8）公主と吐谷渾王の一族は涼州・靈州に移住し、一族の墓誌が武威（甘肅省）で出土している。墓誌によれば公主は則天武后より武姓を賜り西平大長公主に改封され、聖暦元年（六九八）靈州で死去した。夏鼎著、樋口隆康他訳『中国考古学研究』（学生社、一九八一年）、周偉洲編著『吐谷渾資料輯録（増訂本）』（商務印書館、二〇一七年）参照。

（9）弘化公主の入朝時期は『旧唐書』卷四高宗紀上、『資治通鑑』卷一九九による。

（10）金城県主の墓誌も武威から出土した。墓誌によれば、金城県主は会稽郡王道恩の三女で、名を季英とあった。注（8）夏鼎著書、注（8）周偉洲著書参照。

（11）注（7）参照。

（12）文成公主に関しては、佐藤長『古代チベット史研究』上巻（同朋舎、一九七七年、初版一九五八年）、山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』（岩波書店、一九八三年）等参照。

（13）「親迎」は新郎が花嫁を迎えるため花嫁宅に赴く儀礼。藤野月子「和蕃公主の降嫁における婚儀の實態」（『東方学』一二四輯、二〇一二年七月）参照。

（14）時期は『旧唐書』卷七中宗紀による。

（15）佐藤長氏はチベット語史料も活用し、金城公主の没年が開元二十七年、公主の訃報が唐に伝わったのが開元二十八年と考証する。注（12）佐藤著書四七八～四七九頁。

- (16) 岡崎裕子「金城公主の書状―唐玄宗皇帝と和蕃公主の音信」(『東アジアにおける皇帝権力と国際秩序』二〇二〇年、汲古書院) 参照。
- (17) 『冊府元龜』卷九七九外臣部和親二、注(3) 拙著参照。
- (18) 愛宕松男『契丹古代史の研究』(東洋史研究会、一九五九年)、注(3) 拙著等参照。
- (19) 李失活入朝、公主降嫁の時期は『旧唐書』卷八玄宗紀、『資治通鑑』卷二二一による。
- (20) 永樂公主の出自は『冊府元龜』卷九七九外臣部和親二に「東平王の外孫楊元嗣の第七女」とある。東平王續は太宗の子紀王慎の子(『旧唐書』卷七六太宗諸子伝による)。
- (21) 玄宗の泰山封禪は開元十三年。『旧唐書』卷八玄宗紀。
- (22) 時期は『旧唐書』卷八玄宗紀、『資治通鑑』卷二二三による。
- (23) 奚は契丹と行動を共にし、契丹とあわせて両蕃と呼ばれた。注(18) 参照。
- (24) 李大輔入朝、公主降嫁の時期は『旧唐書』卷八玄宗紀、『資治通鑑』卷二二一による。
- (25) 『旧唐書』卷八玄宗紀では、固安公主を「辛景初の娘」と記す。
- (26) 注(22) 参照。
- (27) 『唐会要』卷六和蕃公主伝の固安公主伝は、塞默羯が突厥と気脈を通じていたことを伝えている。奚と突厥の関係については注(3) 拙著、注(3) 拙稿を参照。
- (28) 『新唐書』諸帝公主伝によれば、成安公主は中宗の娘で、韋捷に降嫁した。
- (29) 交河公主は二人いる。①阿史那懷道の娘の媛で、蘇祿に降嫁した。和蕃公主の交河公主はこの女性。②阿史那昕(懷道の子)の妻の涼国夫人李氏。注(4) 石川論文参照。

- (30) 突騎施は西突厥を構成する十部族の一つ。松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究(増補版)』(早稲田大学出版部、一九七〇年) 参照。
- (31) 蘇祿は突厥・吐蕃とも通婚し、交河公主も加えて三人も可敦を娶り、婚姻外交を展開し権力強化を図った。拙稿「突厥・吐蕃・ウイグルが周辺諸国との間で展開した婚姻外交と東部ユーラシアの国際情勢」(『鷹陵史学』四四号、二〇〇八年) 参照。
- (32) 阿史那懷道は西突厥可汗の末裔。父の斛瑟羅は唐から濠池都護・繼往絶可汗に任じられ西突厥の遺民を統治したが、突騎施の烏質勒に国を追われて唐に亡命し長安で没した。
- (33) 石川澄恵氏は、阿史那懷道の妻安氏の墓誌に、公主のために「交河に湯沐の邑を開いた」と記されている事から、公主の名は「金河」ではなく「交河」であると考察した。注(4) 石川論文。
- (34) 『太平広記』巻二八〇、夢五、豆盧栄によれば、唐に帰国後の交河公主は娘の夫・豆盧栄のもとに身を寄せ任地の温州で生活したが、袁晁の乱が勃発したため避難を余儀なくされたという。注(1) 長沢論文四五頁註五四参照。
- (35) 『資治通鑑』巻二二三、玄宗開元十四年条に同様の記載がある。
- (36) フェルガナについては前嶋信次「タラス戦考」(『東西文化交流の諸相 民族・戦争』誠文堂新光社、一九八二年) 参照。
- (37) 『唐大詔令集』巻四二「封和義公主制」は和義公主の出自を「四従弟前河南府陽城県令参第四女(玄宗の従弟で先の河南府陽城県令だった李参の四女)」と記す。
- (38) 『旧唐書』巻九玄宗紀下、『冊府元龜』巻九七九外臣部和親二も、天寶四載三月に静楽公主が契丹の李懷節に降嫁したことを記す。

- (39) 『旧唐書』卷九玄宗紀下、『冊府元龜』卷九七九外臣部和親二も、天寶四載三月に宜芳公主が奚の李延寵に降嫁したと記す。
- (40) 崔明德氏は、『全唐文』卷三四四、顔真卿撰「和政公主神道碑」の記述から、寧国公主の妹の和政公主（肅宗三女）が天寶十四載（七五五）に二十三歳であったと指摘。注（1）崔明德著書二五三頁注一。となれば、ウイグルへ降嫁した時（七五八年）の寧国公主は幼女ではなく、二十七歳以上であったと推定される。
- (41) 例えば匈奴には殉死の風習があり、単于が死ぬと寵愛されていた臣下や妻妾が殉死した（『史記』匈奴伝）。
- (42) 突厥では死者があると、親族が刀で顔を傷つけ、大声をあげて泣いた（『周書』突厥伝、『隋書』突厥伝）。
- (43) 光親可敦は僕固懷恩の娘で、崇徽公主の姉。乾元元年（七五八）頃、肅宗の命令で移地健（後の牟羽可汗）に嫁いだ（『旧唐書』迴紇伝）。注（3）拙稿参照。
- (44) 公主降嫁の資装費は、真公主で五百万緡、假制公主で二十万緡と言われる。注（2）日野論文参照。なお、後代の憲宗は元和十二年（八一七）藩鎮の乱の鎮定に莫大な軍事費を要したためウイグルへの公主降嫁を延期している（『資治通鑑』卷二四〇）。安史の乱後の逼迫した財政状況下での公主降嫁は唐にとって大きな負担になっていたのである。
- (45) 徳宗は吐蕃に対抗するため、宰相李泌の提言する「ウイグル・南詔・大食との連繋による吐蕃包圍網の構築」を試みた。咸安公主の降嫁も唐・ウイグル連合による吐蕃対策の一環。佐藤長『古代チベット史研究』下（同朋舎、一九七七年）、注（3）拙著参照。
- (46) 『冊府元龜』卷九七九、『唐会要』卷六和蕃公主伝は「孝順端正智恵（慧）長寿可敦」と記す。
- (47) 太和公主の降嫁も唐・ウイグル連合の吐蕃対策の一環。拙稿「九世紀前半の東部ユーラシア情勢と唐の内治のための外交」（『史窓』第七三号、二〇一六年二月）参照。

(48) 突厥では日の出を拝むため可汗の天幕は東を向いており(『周書』突厥伝)、東方を重んじた。ウイグルでも突厥と同様であったと思われる。

(49) 突厥では可汗の即位時、重臣達が可汗を毛氈の輿に乗せて担ぎ、太陽のまわる方向に九回まわし、一回まわるごとに可汗に拝礼した(『周書』突厥伝)。公主も可汗の即位儀礼に倣って、可敦になる際に同様の儀式を行ったと思われる。

(50) ウイグル可汗国は八四〇年キルギスによって滅ぼされ、ウイグルの遺民は幾つかの集団に分かれて甘州や高昌等に逃走した。唐の北辺に逃走した集団(南遷ウイグル)の動向や唐の対応策については、村井恭子「九世紀ウイグル可汗国崩壊時期における唐の北辺政策」(『東洋学報』九〇巻一号、二〇〇八年)参照。

(51) 『会昌一品集』卷十三、『全唐文』卷七〇三の「請遣使訪問太和公主状」。

(52) 『会昌一品集』卷五、『全唐文』卷六九九の「賜回鶻可汗書」。

(53) 『会昌一品集』卷五、『全唐文』卷六九九の「賜太和公主勅書」。